

あなたのキャリアストラテジーPart II

先輩に学ぼう!

第二回 農学部キャリア講演会 2006年9月31日

昨年9月31日、盛況だった前年に引き続き、農学部キャリア講演会の第2回が開催されました。今回は会場を農学部1号館8番講義室のほか弥生講堂にも広げ、民間企業、研究機関、官公庁などで活躍する諸先輩21名にご講演いただきました。会場には講演者との懇談スペースも設けられ、なごやかな雰囲気の中でキャリアの実像に迫る質問をされた方も多かったのでは。ここでは、当日の講演から6名の先輩たちの声を紹介합니다。



環境省総合環境政策局環境影響評価課 評価管理係長

幅広い視野を!

大学ではシカとネズミ、大学院ではクモを対象に、一人で山の中に入って研究をしていましたが、世の中を少しずつでも変えていける仕事として行政に興味を持つようになりました。そして環境省に自然系の技官として就職し、国立公園行政や絶滅危惧種の保全などの業務に携わって6年目になりました。自然に関わる仕事ではありますが、業務の大半(ほぼ全て?)は霞が関でのデスクワークです。この点については甘い幻想を持たず正しく認識した上で、行政官として成し遂げたいことがある人は、就職先としてぜひ検討してみてください。また、行政官には幅広い知識や能力が求められます。学生時代に身につけた程度では全く不十分で、私自身、自分の知識・能力不足を痛感しつつ、研鑽を続ける毎日です。環境問題に関わる仕事をしたいと考えている皆さんには、「環境オタク」になるのではなく、もっと幅広い視野から物事を考えられる人になるよう意識しながら、残りの学生生活を過ごすことをお勧めします。

森林科学専攻修士課程 平成12年度修了
杉村 素樹

日本学術振興会特別研究員 DC

(2007年4月より)日本学術振興会特別研究員PDとして農業環境技術研究所に所属

研究が作る人のつながり

極めて漠然と「食料・環境問題」に関心があった駒場時代。4年時にその問題の多くが「土」と関連していることに気づき、土壌系の研究室を選択。以来、良き師、同世代の仲間との出会いに恵まれ、研究中心の日々を送っています。

研究は孤独な闘いという側面もありますが、決してそれだけではありません。自然科学系の研究者は基本的に科学的真実に対してのみ忠実であればよく、そのため研究を通してできる人のつながりは、上下関係、利害関係がありません。研究成果を挙げて、人間らしい関係を国境に関係なく広げていく…これが研究の大きな醍醐味ではないかと感じています。

どんな道に進むにしろ、周りとの関わりなしの人生はありません。自分自身をじっと見つめることも必要かもしれませんが、意識のベクトルは基本的に外に向けて、具体的に行動することをオススメします。自分が何者で、どうしたいかは、おのずと分かってくるのではないのでしょうか。

生物・環境工学専攻 博士課程3年 在学中
常田 岳志

味の素パッケージング(株)包装技術センター 海外支援業務統括

モノづくりの誇り

私は食品包装設備の技術者として、新設備立ち上げの為に世界各地を飛び回る日々を送っています。私がみなさんにお伝えしたいのは、「モノづくりの誇り」です。製造業は当然企業活動であり、利潤を追求する事が目的です。しかし、新聞を賑わす一部のマネーゲームの亡者を除き、お金だけを目的に進退することは難しいものです。純粋に良いものを世に送り出したい、お客様を喜ばせたい、その気持ちがメーカー社員の誇りです。みなさんの中にはIT、コンサル、金融等の業界を志望される方も多いと思いますが、どれも何らかの実体と与えられた符号を情報として扱う仕事であり、必ず実体としての「モノ」がなければ世の中の経済活動は成り立ちません。近年の新卒者のメーカー離れ傾向に、私はモノづくり大国であった日本の将来への危惧を感じます。みなさんには是非勇気と夢、そして誇りを持って、私達のモノづくりの世界に飛び込んで来てもらいたい、そのように思います。

生物・環境工学専攻修士課程 平成10年度修了
村上 善行

農林水産省大臣官房国際経済課 国際専門官

困難だからやりがいがある!

「貿易自由化の足を引っ張るな」「補助金ばかり要求するな」。農林水産省にこういう文句を言う人がいます。私は胸を張って反論したい、農業や食料の問題はそう簡単ではない。農林水産省には、困難な問題が山積しています。でも、だからこそ、やりがいがあるのです。

私の仕事は、WTOやFTAなどの国際交渉。日々、貿易自由化を推進しながら、いかに我が国農業を維持・発展させていくかを考えています。自由化の推進を主張する経済界と保護を要求する農業者。その相反する要請に応えなければなりません。交渉の結果、国内農業の競争力が高まれば良いですが、衰退させてしまう可能性もあり、微妙なバランスが求められます。

米国大統領であったリンカーンは、米国農務省を「People's Department(人々の役所)」と呼びました。困難で大変な仕事ですが、農業や食料といった国民生活に密接に関連した仕事を担っていることを自分は誇りに思います。

農業構造・経営学専修 平成10年度卒業
木村 崇之

理研バイオリソースセンター 室長

研究職に一番大切なものは?

大学院を修了してから約20年間、厚生労働省と独法の2つの公的研究機関で働いてきました。公的研究機関で研究を行うには通常、定年制と任期制の2つの職種があり、今はかなりの比率で任期制が高くなっています。現在、日本の任期制には制度的疲弊が見え始め、大学院へ進んで研究を続けようという学生の意欲を削いでしまっています。しかし任期制でも条件の良い職場を選べば、一番大事な若い時期に研究に集中でき、研究能力を高めて、PI(principal investigator)となる基礎を作ることができます。

大事なことは、NatureやScienceへ論文を出すことではありません。自分の仕事を着実に仕上げ発表していくことです。そうすれば必ず世界の同業者が覚えてくれます。他人に頼らずにそれを続けることで、独立した力が生まれ、また運も引き寄せられます。これは皆さんにはそれほど難しいことではないでしょう。日本の科学を支えるため、ぜひ積極的に研究職を選んでいただきたいと思います。

畜産獣医学専攻博士課程 昭和61年度修了
小倉 淳郎

国立感染症研究所 生物活性物質部 主任研究官

研究者を目指す皆さんへ

研究者になるためには何をしたらいいのか?ととにかく、研究室にどっぷり漬かること。私なら迷わずそう答えます。

研究室中心の生活を送る(例:寝泊まり)。教授や先輩と議論する(即ち、酒を酌み交わす)。研究以外のことにも打ち込む(ソフトボールなど)。そういったことが研究者としての礎を築くことに必ず繋がるでしょう。

私は、真菌症、いわゆるカビによる病気を克服するための研究を行っています。対象の一つにコクシジオイド症があります。世界で最も感染性の高い真菌による感染症で、肺から全身へと広がり患者に悲惨な結末をもたらすことも少なくありません。

感染症の研究は常に危険に曝されている反面、病気で苦しんでいる人の役に立てるという使命感を感じるができます。人の役に立ちたいと思っている人にはぜひ研究者を目指していただきたい。農学とは異なる分野ですが、研究室で培った技術や考え方が存分に活用できます。志の高い皆さんに大いに期待しています。

応用生命工学専攻博士課程 平成10年度修了
梅山 隆